



国際RI第2730地区

# 宮崎南RC 週報



**奉仕の精神を大事にして継続性のある  
楽しく充実したロータリー活動の実践を！**

ロータリー月間  
母子の健康月間

## 第2104回例会 2022.4.25

会長／田中 寛 幹事／田中靖彦  
副会長／山地久守 会報／長澤好太郎  
例会場／宮崎観光ホテル  
ソング／日も風も星も

### 会長挨拶



田中 寛会長

5月の連休が近づいてきました。連休中の5月3日は憲法記念日であり、昭和22（1947）年5月3日に日本国憲法が施行されたので、それを祝して国民の祝日となっています。日本国憲法は、その前文に、憲法を規定する趣旨と、憲法の基本原理として国民主権、平和主義、基本的人権の尊重を明確に規定し、かつ国際平和を希求することを大きな理念としています。この機会に、一度憲法前文を見ていただければと思います。日本は、上記憲法の下、憲法施行後これまで75年間以上にわたり、戦争をすることなく、平和を保持し続けています。

一方で、世界に目を向けると、ロシアのウクライナ侵攻問題がなかなか解決しません。欧米をはじめとする世界各国が、ロシアに対する厳しい経済制裁をするなどして、何とか戦争を早く終結させようと努力していますが、解決に至っていません。ロシアとウクライナ両国は、小麦を含む穀物の生産量が世界的にかなり高く、両国の穀物輸出量は、世界の3分の1近くに上るといわれており、天然資源も豊富です。しかし、このまま戦争が続けば、発展途上国を含め、両国から、国内消費量の6割～8割の小麦等の穀物を輸入している中東やアフリカの諸国は、1年から1年半のうちに飢餓が起きかねないと危惧されています。両国の戦争は、世界経済にもかなりの悪影響がありますので、何とか早期に紛争が解決することを心から願っています。

### 出席委員会報告

中武照利委員長

#### ●出席状況

本日状況		前々回修正出席状況	
会員数	(49) 50名	マークアップ数	1名
本日欠席者数	17名	修正出席率	65.31%
本日出席者数	33名	マークアップされた方	
出席率	67.35%	寺村明之会員	

ニコニコ  
BOX 3件 5,000円  
累計 341,000円

募金箱 5,780円  
累計 130,118円

ロータリークラブの究極の目的は、世界の恒久平和ですので、ロシアの侵攻により被害を受けたウクライナ国民の医療費や食費等を援助するために、ロータリークラブの寄付活動も行われています。そのことをふまえ、現在の私個人の希望としては、将来的には全世界の国々について、全ての国の人々がロータリアンになり、それによって世界の恒久平和が実現できればとの思いが強くなっています。

当ロータリークラブの今後の活動につきましては、当クラブの定款や、細則等で、活動の実情に合っていない規定があることから、規定を見直したうえ、一部改正したいと思いますので、ご協力いただきますようお願い致します。

### 幹事報告

田中靖彦幹事



#### 1 例会の食事形式

コロナ感染対策として、現在スクール形式にて例会のお食事をして頂いておりますが、このスタイルをいつまで行うのか？

5月の理事会にて協議しまして、お知らせいたします。

### 親睦委員会

鈴木浩二委員長



6月5日(日)宮崎南ロータリークラブゴルフコンペのご案内です。フェニックスカントリークラブでスタート9時24分です。



### 小園 隆司会員

2週間ほど、腰の手術で入院していました。



### 島田 博良会員

電気の国家試験に合格しました。



### 開地 俊昭会員

無事、地区研修・協議会を終える事が出来ました。

## 会員卓話

### 印鑑証明書と電子署名について 杉本英一会員



私たち司法書士は日頃の業務の中で、お客様の実印、印鑑証明書を取り扱う機会があります。昨年だと思いますが、「脱ハンコ」というワードがマスコミ等で取り沙汰され、印鑑に親しんだ業務を行っていた私は、これを残念に思っていました。本日の卓話では、「脱ハンコ」、「印鑑証明書」、「電子署名」についてお話ししたいと思います。

#### 「脱ハンコ」

日本政府は主要政策の筆頭として、「行政のデジタル化」を挙げてきました。近年は、働き方改革の推進や新型コロナウィルス感染症の拡大防止などのさまざまな要因から、テレワークを導入する企業も少なくありません。そこで問題となったのが、さまざまな契約書や稟議書などには押印が必要であるということでした。そこで、「押印のためだけに出社する」といった問題が起こらないように脱ハンコの実現が急務となりました。現在では行政手続きの9割以上で押印不要もしくは廃止の方向となり、婚姻届・離婚届や年末調整、車検の申請時など、認印を使った押印も廃止されつつありますそうです。

このように「脱ハンコ」によって、認印又はシャチハタで押印されていたものについては、省略又はそれに代わるものによって代替されることになりましたが、では法務局への添付書類である印鑑証明書及び申請書又は委任状への実印による押印はどのように成了した、又はどのようにしていくのでしょうか。

#### 「印鑑登録制度」

そもそも個人が一つの印鑑を登録し、その印鑑で押印された文書が押印者本人によって作成されたものであると推定する制度はどのようにして広まったのでしょうか。

今日の日本の「ハンコ文化」は徳川幕府のキリストン弾圧政策から生まれたものとされています。島原の乱後、寛永16年に幕府は鎖国政策に踏み切りますが、翌寛永17年にキリストン奉行の職を設けて、全国の庶民に対し、いずれかの寺院の檀家となることを強制しました。その際にキリストンではない旨の制約を求め、それは寺院の宗門帳に署名・押印する方法で行われました。

さらに、檀家となった後も1年おきにキリストンを信奉していない旨の宗旨証文に押印のうえ提出させて、宗門帳の印影を照合する手続きが行われ、宗門帳への押印のないものや、宗門改（しゅうもんあらため）の際に登録印と異なる印を押印したものについては、キリストンの嫌疑がかけられ、拘留・投獄され、多くは命を絶たれたと言われています。

その後、次第にキリストン弾圧の目的が薄らぐにつれて、宗門帳は町村の役人の作成する人別帳に吸収されることとなり、庶民はお役人にその印鑑を届け出る制度がつくられていきました。

そして、時は流れ、明治11年（1878年）に印鑑登録の事務が市町村において処理されることとなり、以来今日にいたるまで一貫して市町村の窓口で印鑑登録証明事務が行われています。

#### 「電子署名」

このように古くから私たちの生活に根差してきた印鑑登録制度ですが、デジタル化によってこれに代わるものには何かということになると、「電子署名」になります。

電子署名に根拠を与えるものとして、「電子署名法」という法律が制定され、これは2001年4月1日、約21年前に施行されました。この電子署名法に規定されている電子署名について、ここで二つの方式をご紹介します。

#### 1 公的個人認証にもとづく電子署名及び電子証明書

- マイナンバーカードに電子証明書を付与してもらい、これを用いて電子署名をする方法

#### 2 民間事業者発行の電子署名及び電子証明書

- 認定認証事業者から電子証明書を発行してもらい、これを用いて電子署名をする方法

個人による電子署名の利用は、マイナンバーカードの普及によるところですが、総務省が発表した2022年4月1日時点のマイナンバーカードの交付率は全国で43.3%、都道府県別では宮崎県が最も高く56.4%、市町村では、都城市が78%で全国1位とされています。電子署名が一般化するためには、マイナンバーカードの普及率が70%以上でなければならないと言われていますので、このデータからすると、電子証明が一般的に利用される社会は目前に迫っており、これに対応するため、業務の改善を検討しなければならないと考えています。



### I. 雨といのはじまり(奈良時代～)①

日本の文献に雨といが出てくるのは、平安時代後期に作られた歴史物語「大鏡」の中に記述されています。当時の「受け樋」は「懸樋(かけひ)」と言われ、雨水を排水する役目よりも、飲料水や生活用水として貴重であった雨水を屋根から水槽にためる「上水道」の役割を果たしていました。

#### ① 現存する最古の排水雨とは「東大寺三月堂」

現在のように屋根の雨水を排水するという役割の雨といで、わが国に現存する最古のものは奈良時代の733年に建立された東大寺三月堂の木製だといわれています。この雨といは厚さ5cmの板3枚をU字型に組み立てたものです。

#### ② 雨といは「神社仏閣」から普及

雨といは江戸時代まで神社仏閣を中心に普及してきました。当時の神社仏閣にはすでに飛鳥時代に中国、朝鮮から伝来した瓦が使われ、雨水を処理する雨といが必要だったと考えられます。一方、一般の住宅は「草葺き」や「かや葺き」がほとんどで、屋根自体が水分を吸収することや、軒先を作業場として利用する必要から庇を長く張り出して軒を深く取っていたため、雨樋の必要がありませんでした。

### II. 雨といのはじまり(奈良時代～)②

奈良時代の雨といは、大きな寺院など特別な建物だけに使われていたためか、当時としてはたいへん貴重な材料が使われている例があります。859年に建立された京都、石清水八幡宮の雨といは、「黄金の雨とい」です。

この雨といは、1580年の修復に当たって織田信長が秀吉に命じて寄進させたもので、金を主成分に、銀、錫、銅の合金のいもので半円形の雨といがつくりられ、本殿の「受け樋」として取り付けられています。しかし、この「黄金の雨とい」は撮影禁止となっており、一般公開されていない幻の雨といです。また、この神社は江戸時代1634年に三代将軍、徳川家光によって修復された際にも、「箱とい」と呼ばれる角型の雨といが取り付けられています。

### III. 雨といの普及(江戸時代～)

江戸時代に入ると商業が盛んになり、江戸、大阪、京都などを中心に人口が集中し、都市が形成されていきます。それに伴って住宅も密集して隣家と軒を接するようになり、隣家の雨水が流れ込む「雨だれ」が跳ね返って壁を汚し、土台を腐らせるといったトラブルが起こるようになります。一方、密集した「かや葺き屋根・板葺き屋根」の町屋は火災に弱く、ひとたび出火すれば、町中が火の海ということが度々起こりました。大火に悩んだ幕府は1720年、防火のために民家の屋根を「瓦葺き」にするよう奨励しました。また、商家では財産

を火災や盜難から守る土蔵をはじめ、経済力にものいわせて住宅を豪華にすることで、瓦屋根でしかも複雑な屋根構造の建物が出現するようになりました。このように瓦葺き屋根が一般的に普及するようになると、雨水の落下で柱の根元や土台が腐ったり、傷んだりするのを防ぐため、雨といが使われるようになりました。

#### ① 当時の雨といは「木・竹」の天然素材

当時は建築物の場合と同様、雨といの材料として一般的に手に入る木や竹などの自然のものしかありませんでした。とりわけ竹は奈良時代から利用されており、節を抜けばパイプ状になり、半分に割れば半円形になるなど、雨といの材料としてはたいへん好都合であったことから、最もよく使われる材料であったといわれています。

### IV. 雨といの発展(明治時代～)

文明開化とともに、海外との交流が盛んになりました。さまざまな外国の文化が流入し、洋風の建築技術も紹介されています。そのなかには、すでに高度な加工技術による装飾性にすぐれた雨といも含まれていました。また、当時「ブリキ屋さん」と呼ばれる専門職が誕生します。ブリキとは薄い鉄板に錫メッキしたものです。当時は輸入したレンガの包装材料や石油の容器などにつかわれており、これらの廃品を加工して、煙突や流し台、半円形の軒とい、円筒のたてといなどを作る職人が現れました。これが現在の「建築板金業者」のルーツです。

#### ① 金属製雨といの加工技術の進歩

金属製の雨といが出現する下地となった加工技術は鎌倉時代から、なべ、かま、農具などの修理をしていた鑄掛(いかけ)屋、銅をかこうして長もち、たんす、灯籠などの装飾金物を作っていた銅(あかがね)細工師、江戸時代後期には錫(かざり)師と呼ばれた人たちの技術です。明治になり、海外から入ってきた金属板を加工するうえで、役立ったと考えられています。

#### ② 明治から昭和初期、装飾雨といが出現

一般住宅は「ブリキ、トタン」が主流に金属材料による雨といづくりが一般に普及していくのが明治時代です。当時の板金職人たちは板金技術を高めていました。この頃には銅板が徐々に普及し、高級感や縁青の発生などが、わび、さびといった風流好みの日本人の感覚に受け入れられて、一文字屋根や雨といの材料として使用されました。

一部の高級な建物には、雨といに竹や梅のデザインを細工したものや、縁起をかついで蛇や龍などの飾り物を取り付けた「装飾雨とい」がつくられるようになりました。こうした技術や軒先を引き立たせる装飾性が雨といの顔といわれる軒といとたてといをつなぐ集水器(アンバー、上合)に引き継がれ現在に至っています。

一般住宅では、ブリキやトタンと呼ばれる亜

鉛鉄板が主流となり、さらに、戦後になって、着色亜鉛鉄板(カラートタン)とともに、雨とい材の他、屋根、外壁の材料として広く普及していきました。

## V. 塩ビ雨といの登場（昭和30年代～）1

第二次世界大戦が終わり、それまで軍事機密とされていたプラスチック技術が一般に公開されると、民需用としてのプラスチックの活用が本格化します。成形がしやすく、軽い、硬質、軟質の製品を自由につくれる、耐久性にすぐれ、コストが安いなどの利点から、生活用品や工業用品などに幅広く利用され、「プラスチック万能時代」を迎えることになります。

こうした中で、塩ビ製(プラスチック)雨といが初めてわが国で登場したのは昭和32年のこと。これまでの金属製雨といの欠点であった、腐食による耐久性の問題を解決した画期的な商品として大きな注目を集めました。ところが、当時「ビニール雨とい」と呼ばれていた言葉に象徴されるように、「熱に弱い」という難点があり、施工後の変形やたわみなどの問題が発生。建築業界から敬遠されることになりました。

### ① 強いプラスチック雨といの登場

これらの問題解決の為、昭和33年に「強いプラスチック雨とい」の開発に成功しました。このプラスチック雨といは

- ・原材料の塩化ビニル樹脂に添加剤を特殊配合することで、材質の安定性を高めた。
- ・構造や施工面では「特殊二重差込み方式」などを取り入れた。

材料と構造、施工法と両面から熱の変形防止するための独自の工夫がなされていました。

## VI. 塩ビ雨といの登場（昭和30年代～）2

当時の雨といは住宅用、非住宅用にたくさんのラインナップをそろえ、品質向上の努力によって、プラスチック雨といに対する評価は徐々に高まっています。

### ① プラスチック雨といの普及

昭和30年代から48年までの高度成長期に、花形産業といわれた住宅産業は多忙を極めていました。施工に追われて人手不足に悩まされていた板金業界にとって、プラスチック雨といは便利な部材が揃っていて、手加工の必要性がなく、接着施工で手間がかからないという点でまさにうってつけであり、プラスチック雨といの普及に大きく拍車をかけました。

プラスチック雨といが、雨といの代名詞的存在になるにつれて、単に金属製雨といの代替品ではなく、プラスチック素材の特色と成型技術を生かした「プラスチックでなければできない独自の製品づくり」が手がけられるようになります。そして、従来の「雨水の排水機能」だけではなく、美しいデザインや表面の仕上げによって、意識的に「見せる雨とい」として、プラスチ

ック雨といのイメージを変えるきっかけともなりました。

## VII. ハイブリッド素材雨といの誕生（昭和50年代～）

パナソニックは昭和57年に硬質塩化ビニル樹脂の中にスチール芯を挿入して一体化した「アイアン雨とい」を発売。積水化学工業は平成9年に鉄よりも強く、アルミよりも軽いカーボン繊維を芯材に使用した「カーボン雨とい」を開発しまし、熱による伸縮を低減することが可能となりました。

① 雨といニーズは、外観重視、個性化時代へ  
住宅に関する関心ら次第に外観へと移行していました。

雨といも屋根、外装、エクステリアまで含めた外観のトータルデザインのなかでマッチしたもののが求められるようになっています。

和風から洋風化の高まりによってデザインのシンプル化がすすみ。

- ・軒といの形状は「丸」からシャープなラインを強調する「角とい」へ移行してきています。
- ・軒といは「勾配なし」の仕上げが好まれてきています。
- ・「金具がみえない」のスッキリ仕上げ」が好まれてきています。
- ・いつまでも「変形しない長寿命雨とい」がもとめられています。
- ・和風住宅については伝統志向、本物志向が高まり、伝統的なデザインが好まれています。
- ・和風建築の伝統的素材「銅」が雨といや屋根材として積極的にしようされています。

## VIII. 最後に

雨は屋根の勾配に沿って下に流れていく仕組みになっており、雨樋を伝って排水溝に流れています。しかし、雨といがなければ、雨水は直接軒下に落ちてしまうので、跳ね返った水や泥で外壁が汚れてしまいます。外壁や基礎にひび割れがあれば、そのひび割れに雨水が侵入してしまいます。また、直接雨水が外壁を伝って流れ落ちることで、雨が降るたびに湿度が高まります。高い湿度になることで、コケやカビ、シロアリの発生など様々なトラブルを起こしてしまします。雨といがないことで住宅に直接影響を受けるため、雨漏りのリスクが高まります。雨漏りが起こることで住宅の腐食が起これば住宅の寿命を縮めてしまうことにつながるので、住宅に雨といは重要ということです。

現在ではプラスチック雨といの他、アルミ、ステンレス、ステンレスと銅の複合板、銅メッキステンレス、ガルバリウム鋼板、屋根一体化雨といなど多種多様な雨といが発売されています。

雨といはかつては上水道の役割でありましたが、時代と共に変化し、単なる排水装置としての役割だけでなく、建物を守る重要な役割をはたしています。